

早稲田大学審査学位論文

博士（スポーツ科学）

概要書

日本統治下台湾における武士道野球の受容と展開

**The infusion and popularization of Japanese
Samurai baseball culture in Taiwan during the
period of Japan's colonization**

2012 年 1 月

早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科

林 勝龍

SHENG-LUNG, LIN

研究指導教員：寒川 恒夫 教授

本研究は日本統治下台湾における武士道野球の受容と展開を論じたものである。

明治期に導入された野球は、一高野球部によって精神修養としての武士道野球に変容した。その後、早大野球部のアメリカ遠征がもたらした科学的野球は、合理的なトレーニングを取り入れた新たな武士道野球を生み出した。こうした野球文化は日本中に広がっていった。しかしながら、明治後期より野球の普及と共に野球による弊害が頻繁に起こったため、大阪朝日新聞社はその弊害の絶滅を目指し、在るべき理想像として野球に武士道的行動を求める全国中等学校優勝野球大会を開催した。

日本の台湾領有は台湾人の日本人化を目指し、同化政策に基いた植民地政策を展開した。それと同時に野球も日本を経由して台湾に伝わった。

1920年代までには日本人による日本人の野球基盤が作られたものの、台湾人の野球参加は少なかった。このような状況を一変したのは台湾人の積極的な初等教育受け入れであった。体操科を通じて「武士的競技概念」を身に付け、1920年代より公学校の野球競技が盛んに行われるようになった。

1920年以後、野球の対外交流が頻繁に行われた。そのうち、第三章に取り上げた原住民によって組織された「能高団」という特殊な文明集団は理蕃政策の一環として西部遠征と内地遠征を行い、観る者は従来野蛮・未開を表象される原住民のイメージから文明化されるイメージに転換され、そこに展開される礼儀正しいや謙遜といった日本人的行動様式を含めた。なおかつ観る者に原住民の高い運動能力が認められた。

2008年の調査によると台湾のプロ野球登録選手のうち、台湾人口の2%に過ぎない原住民選手が41.5%を占めていた。本研究は野球による理蕃政策であった「能高団」の活動に注目することによって、今日、台湾野球界における原住民活躍の一つの要因を明らかにすることができた。

1928年、嘉農野球部が日本人、漢民族、原住民の協和する形で創部された。監督の近藤兵太郎は「精神野球」「平等主義」「実力主義」の理念に基き、民族を問わず指導を行った。その結果1931年、嘉農は台湾地区の代表として第17回全国中等学校優勝野球大会に出場し、初出場ながらも準優勝を果たした。大会期間中、三族協和の嘉農選手は大会が求める武士的行動の体現者と報道された。この背景には台湾人の積極的な日本教育受け入れの姿勢があった。これはすなわち台湾人が武士道野球を理解し、日本精神、皇国精神を身体的、思想的、行動的に受け入れたことを意味した。